みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

一神教と多神教 (変わるネパールと変わらぬネパール : グローバル化した世界に暮らす, 第14回)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 真木人 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5116

上五島の中通島にある中ノ浦教会（2004年）

変わるネパールと変わらぬネパール

――グローバル化した世界に暮らす――

第14回

先日、長崎県の五島列島をはじめて訪問した。驚いたのは、新旧さまざまのカトリック教会が各所にあり、熱心なキリスト教徒によって信仰が守られていることだ。1549年、鹿児島にはじめて伝来したキリスト教は、禁教と迫害の受難を経ながら九州の離島において脈々と受け継がれている。そこに多神教とは何かが違う、一神教がもつ「頑強さ」をあらためて感じずにはいられない。

思いあたるのは私の実家だ。両親がキリスト教徒の家庭に育った私は、進学して親元を離れるまで初詣というものに行ったことがなかった。また、イースター（復活祭）の卵は食べたことがあっても、七五三がなかったので千歳飴を食べた記憶がない。これがここでいう一神教の「頑なさ」、言い換えれば原理主義的な性格の一例である。

対照的なのは八百万の神を祀り、神棚と仏壇の双方を拝む日本人の宗教観だ。ネパールの国教ヒンドゥー教も山川草木に至るまで崇拝の対象になる点でこれに近い。多神教のヒンドゥー教では、シヴァ神が破壊の神であり創造の神でもあるように1つの神が異なる相をもつ。また、仏教において吉祥天となるラクシュミー女神は、姿形や名を変えた10種の化身として顕現する。本来、仏教はヒンドゥー教の前身であるバラモン教の否定の上に成り立つ。だが、それは必ずしも不連続でなく、仏教にはヒンドゥー教の神々をも取り込む「柔軟さ」、悪く言えば節操のなさがあった。つまり、変幻自在な多くの神格とそれをめぐる融通無碍な解釈は、多神教ならではの柔軟な性格なのだ。

他方で、キリスト教と並ぶ一神教の雄はイスラーム教だ。トルコである老人に「あなたは何の本を読みますか？」と唐突に尋ねられたことがある。もちろん彼は『イグザミナ』といった答えを期待しているのではない。コーランか、聖書か、すなわち私の宗教を尋ねているのだ。この絶対的な存在を確信する世界観（コスモロジー）は、一神教を理解する鍵であろう。こうしてみるとイラク戦争は、一神教どうしの衝突という側面をもつ。私は基本的に一神教対多神教とか、森の文明対砂漠の文明といった素朴な二元論に与しない。だが、妄信的な日本のアメリカ追随を目にすると、背後にある世界観を今一度問いたくなる。「神の祝福を」で終わるブッシュ大統領の演説は、「アラーのお恵みを」と同じ程度に、原理主義に染まった宗教国家の胡散臭さを感じさせるのだ。

一神教と多神教

写真・文◎国立民族学博物館助教授 南 真木人

1961年、札幌生まれ。筑波大学大学院修了。専門は文化人類学、南アジア研究。主要共著／『〈都市的なるもの〉の現在』（東大出版会 2004年）、『嗜好品の文化人類学』（講談社 2004年）、『エスノ・サイエンス』（京大出版会 2002年）など。